

まちの史跡めぐり

208

国会図書館所蔵資料の閲覧

(4)

町文化財専門委員
石 瀧 豊 美



図①

国立国会図書館デジタルコレクションで、「糟屋郡須恵村を検索した結果を報告します。前回の709件に対し、今回は741件がヒットしました。前回の報告後に気付いたことが一つありました。1983年3月、町制施行30周年記念で出版された『須恵町誌』が「送信サービスで閲覧可能」として提供されていること(図①)。「送信サービスで閲覧可能」とは、国会図書館で利用者登録をした後、ログインすることで、本来は福岡県立図書館に行き、備え付けのパソコン画面でしか閲覧できない図書を、自宅のパソコンで閲覧できるようにするサービスです。

私がそもそも須恵町の歴史を調べることになったのも、今から40年以上前に『須恵町誌』の編さんに携わったことからでした。『須恵町誌』についてはまた別に

取り上げることにはしたいと思いません。『須恵町誌』は役場で購入できます。また今年は昭和28年(1953年)の町制施行から70周年に当たります。引用史料中の糟屋・粕屋の混用は元のままです。また、句読点・濁点を補っています。●高野江基太郎『日本成礦誌』(積善館支店発売、明治41年9月28日発行)高野江基太郎は福岡の人で、他にも『門司港誌』・『筑豊成鉱誌』・『儒俠亀井南冥』などの著作があります。まず「炭山別出炭高の一覧を見ることにします。福岡県内の粕屋方面に31の炭鉱を上げています(164ページ)。ただし粕屋方面には糟屋郡以外にもいくつか含まれています。その内、粕屋郡須恵村が5つです。鉱区番号、位置、四十年中出炭高は略しました。

炭山名称	鉱業人
石 旅	竹内直次郎
海軍新原	海軍省
礼 長	岩谷松平
河 三	河野修造
木 植	矢作忠良

この内、興味深いのは岩谷松

平(1849-1920)です。天狗煙草という銘柄の紙巻き煙草の製造・販売で成功した人物です。岩谷松平が長礼炭鉱を経営していたことは初めて知りませんでした。これは『須恵町誌』にも載っていませんでした。次に、新原海軍探炭所について詳しく述べたところを見ておきます(186ページ以下)。(二)新原海軍探炭所

平均約十二、四度の傾斜を為し、其の走向は東南より西北に向ふ。断層の多きは粕屋地方の特色にして、本鉱区内亦頗る多数の断層あり。其の大なるものは切差(きりさ)と読むのでしようか)百尺余に達する所ありと云ふ。爆発瓦斯の存在も、亦本炭山経営者の最も憂ふる処にして、就中五重炭層は三重炭層より多量なり。坑内の湧水は比較的小量(少量)にして、水質無害、灌漑用に適す。

▼位置 海軍探炭所は福岡県筑前国糟屋郡須恵村大字新原にあり。汽車便を以てすれば、九州鉄道本線香椎駅にて博多湾鉄道線に乗り換へ、七哩(一マイルは約1.6キロ)にして新原駅に達し、同駅より徒歩三、四分間にして本庁舎(現在の新原公園)にありましたに達す。(略)

▼採掘法及坑口 本炭山の採掘法は主として長壁式によるも、間々残柱式を混用す。坑口は現時第三坑、第四坑、第五坑の三斜坑あり。第三坑は桜原に、第四坑は新原に、第五坑は志免に鑿つ。而して第三坑は明治廿六年(1893年)に、第四坑は同州四年(1901年)に、第五坑は同州九年(1906年)九月に開坑せしものなり。第三坑と第四坑とは、其の坑口の距離四百間にして、今や坑内相通するを以て、坑夫出入の人道坑は、三坑・四坑兼用とし、第四坑構内に設けしも、揚炭、排水、通気の設備は個々独立の装置とせり。第五坑は第四坑を距る約千五百間(二哩弱)の所にあり。各坑本卸の深さ(明治四十年(1907年)十二月調査)は左の如し。

▼炭層 当炭山鉱区内に存在する炭層は数多あるも、其内の重なるものは、ヒリ筋炭層、二重炭層、一重炭層、三重炭層、五重炭層にして、以上各層中三重炭及び五重炭を最良とす。今其の分析表を示せば左の如し。

石炭分析表 (略) 三重炭層は平均厚さ約四尺、正味約三尺三寸(三坑方面)、五重炭層は平均厚さ約四尺、正味約三尺一寸(五坑方面)にして、

- 第三坑 三百七十間
- 第四坑 三百間
- 第五坑 九十五間

- 官役鉱夫 四百六十人
- 受負鉱夫 五百六十人

●採炭所に於ける現時の重なる役員は左の如し。

- 所長 海軍機関中佐 鈴木富三
- 主計長 海軍主計少監 室田 魁
- 軍医長 欠員
- 技術管理者 海軍技師 石橋政信
- 第五坑長 海軍技手 萩尾善次郎
- 第二、四坑長 海軍技手 鈴木 茂
- 鉱務囑託 石田 収
- 医務囑託 原田勝郎

▼共済会 一般共済の目的を以て、ヶ月掛け金五銭宛として、共済会を組織し、尚ほ外に毎月廿銭宛貯金せしめ、内半額は据置貯金、他の半額は普通貯金として事務所に保管せり。

▼酒保 共済会附属事業として酒保(軍隊内の売店を酒保と言います)を設置し、低価を以て日用品の分配を司らしむ。(民業炭山に於ける売場場と同じ)

▼鉱夫 第三坑・第四坑に於ける事業中、坑道の開鑿と石炭採掘とは、其の事業を受負はしめ、其の余の事業は一切直轄にて使役す。其の員数左の如し。

て生年月日も卒業年次も先の原田勝郎と全く同じです。

これは長崎医学学校が第五高等学校医学部と改称の後、明治34年(1901年)に長崎医学専門学校へと改称したことによります。長崎医学専門学校『研瑤会雑誌』59号によると、陸軍二等軍医として日露戦争に出征しています。■は医籍登録番号です。原田勝郎 烏飼六本松 内産婦科 原田医院 明治九年八月十六日生 明治卅三年五高医学部卒業 ■一一八八三号 卒後一年志願入営、日露役従軍後、宗像郡赤間町二三年間海軍探炭所医局勤務、次イデ粕屋郡須恵村二八年間開業、大正九年六月現地開業、福岡高等学校医(校)医。この学校は六本松にあり、後に九州大学教養部となる。趣味謡曲・書画・力剣・読書(福岡県、1ページ)

写真①は『日本成礦誌』187ページ掲載の「新原海軍探炭所第三坑積込場」の写真です。桜原の第三坑は宇美町との境界付近にありました。本文の説明を読むと、実際には第四坑の設備ではないか、と思われる。この写真では右端の線路が香椎線で、第三坑ならば位置的に引き込み線が必要ですが、第三坑、第四坑の石炭は直接、貨車に積

写真①

写真②

